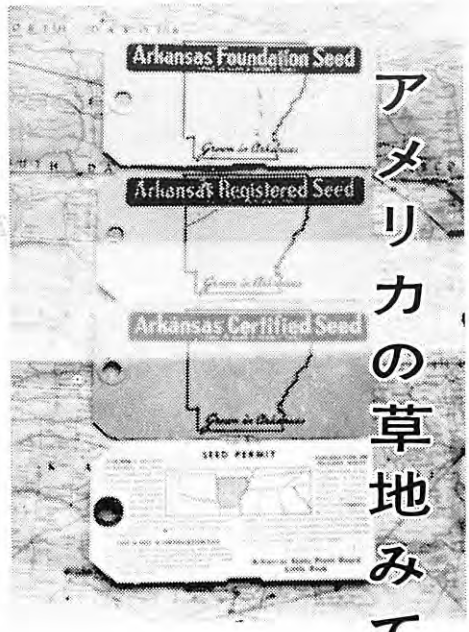
アメリカの草地みてある記

（その四）

上家富成



オクラホマのあとがき

（一）キリスト教とアメリカ

ミシシッピー州で私は見知らぬ外人からの手紙を受取つた。その意味は、貴郎がオクラホマのウッドワードへ来られた時、教会へ子供を混えて二〇〇名位参集し、日本の色々の話を聞き交歓会を催したいから是非承諾してくれ、というのである。早速チームで相談し日時の回答をしたが、生憎実現しなかつたのは残念なことであつた。

広いアメリカで今のわれわれは、顕微鏡的存在にも値しないのに何故こんな手紙を貰つたのか、色々考えさせられたのである。国内、網の目のような組織網からの情報や宣伝、伝導などは、底知れぬものを持つているのではないだろうか、またその力こそ今日の大合衆国発展の偉大な礎石でなかつただろうか。

昔ヨーロッパからアメリカ目指してメイフラワー号に乗つた人々は、宗教的な新天地を求めるためであり、今月自由の国アメリカ建国の精神は、すなわちキリスト教の精神がその土台になつているといわれ、行く先々の小さな町や村落には必ずそれ相応に立派な教会があり、毎日曜の礼拝は欠かされることが無い、またこの教会は農村の色々な活動の中心にもなつている。それは曠野に孤立した農場生活の人々にとつて、教会こそ彼等共通の熱望であつた信仰の自由と言論の自由、そして集会の自由の拠り処であつたに違いない。このような教会も信望厚く伝導に挺身する宣教師の大いなる力によつて、繁栄を齎したものであろうと、手にした一葉の手紙を通じて想像されたのである。

（二）牧畜について

オクラホマ州ウッドワードの一部放牧飼畜場長ニーボン氏は珍らしくしよう洒な紳士であり、その話はきわめて実際的な処が印象的であつた。

(1) 草の種類によつて違うが、草丈の高いものは高刈になるように、もとと草丈の低い草は割合低く食べさせても差支ないものである。

(2) 牛価が下つている時は草生に力を注ぎ、牛価が上つた時は過放牧（Over graze）になる程大いに食わせるやり方が良い経営者といえる。

(3) 棚に張つてあるバラ線の一番上の線が錆ているのは落雷のためである。二番以下の線は草が触れてアースの役をするから落雷の影響を受けない。実際には一〇〇ヤード毎にアースを取付けるべきである。

(4) 放牧地の水のある処に牛が集合し、その附近の草地が荒廃し勝ちなものである。そこで水と塩と飼料をそれぞれ反対に置くことが良い管理になる。普通は風車による貯水槽が水飲場になつており、そこに牛を入れる囲（Beef corral）が設けられている。

(5) 未改良牧野（Range）は殆ど野草地である。それに施設すれば未改良牧場（Ranch）となる。尤も人に見せる目的の贅沢牧場（Luxury Ranch）という名の牧場もある。

ミシシッピー州以西では未改良牧野経営者（Rancher）は野草を対象とした粗放経営であり、以東では造成草地を持つた集約的な改良牧野（Pasture）が大部分であつて、これを Stock Farmer と呼ぶことがある。すなわち前者は放牧方式（Grazing）であり、後者の多くは最近舎飼方式（Green Feeding）を加味した経営になつている。何れにしても草と土地の状態に応じ牧養力（Stocking rate）を定めるわけである。

(6) 家畜競市は二会社共同経営である。市は十月初めが最盛期で一週間位連続市がたち、この期間一〇、〇〇〇〇頭位の取引がある。セリ場は中央円形の土間に引廻わされる牛の値を呼吸もつかぬ早口でまくし立てるのを階段形の高い処から見下ろすお客がセルのである。大部分は六〇〇㌔位の仔牛で一頭一二五ドル（マーヂン一ドルを含む）すなわち四五、六〇〇円位が相場である。良質のものは八カ月で四五〇㌔一三五ドル（四九、三〇〇円）位に取引される。これが来年になると八〇〇㌔で二〇〇ドル（七三、〇〇〇円）位になる。また牡牛は三〇〇ドル（一

牧草と園芸　十月号　目次

◇表紙写真　秋晴れの空の下で冬の飼料を豊富に準備（札幌近郊で）
◇アメリカの草地みてある記　その㈣……上家富成…二
◇私の酪農経営五カ年の歩み　北日本酪農青年研究連盟　谷口正男…八
◇温暖地における養畜農家の夏作飼料作物栽培㈢……水島　隆…三
◇季節の作業　飼料、蔬菜、果樹……一六

○九、五○○円)位、牝牛二○○ドが相場である。

(7) 種牡牛は五—六月中九週間自由巡廻するが一頭当り牝牛二五—三○頭が普通である。仔牛は平均して三月に生れる。生れると番号を付け重量を計り予防注射をし、生後二—三カ月頃角を取る。そして七カ月半位たつた十月十日頃離乳する。また一年に一度は集められ虫害防除のため薬剤を入れた大桶に浸される。この時犢は去勢され所有者を明示するため焼印が焼鏝で押される。

(三) 西部劇のなごり

(1) オクラホマ大学の附属農場は総面積六、○○○エーカー(二、四○○町歩)で九○○頭(一頭当り二・七町歩)の牛が放牧されている。この管理人であるカウボーイは腰にピストルを持たない丸腰だが、お馴染み西部劇名残の勇姿である。五十歳に近いO・Bではあるが鍛えた身体は流石に引締つている。それにしてもこの広い草原に放牧されている九○○頭の牛を二人切りで世話しているというのだから能率万能の国とはいえ恐ろしく活動的なご人達であるらしい。

(2) 赤い太陽が大平原から昇り大平原に没する処、まさに茫漠として涯知れぬこの大平原、その一隅に在るこの牧場自体が茫々として何処に牛がいるのか、眼に見える限りインデアングラスやブルーステムの波である。道路には無関係に強引に自動車を駈けて、漸く木陰の牛群を発見した。牛達は物珍らしげに一斉に頭右の姿勢をとりこちらを凝視して動かない。警笛では近寄つて来る彼なども写真をとるため車外に出ると、申合せたように忽ちすたこらと逃げて行く。全く野生的だ。然しカウボーイは一段と高い馬上から遙かに彼等を観察しまた自由に何処へでも出没出来る馬脚が身上である。アメリカで威力を誇る自動車も此処ではカメムシのような存在でしかない。

オクラホマ州ウッドワードの南部試験牧野の放牧肉牛へレフォード群が木蔭から逃げ仕度の様子、涯知れぬ大平原の牛は全く野生的だ。

(3) エル・レノ(EL RENO)の家畜実験農場は総面積六、八○○エーカー(二、七二○町歩)内、耕地一、○○○エーカー、牛一、○○○頭、緬羊四○○頭、豚八○○—一、○○○頭の現況であり、在来野草や導入牧草の珍らしい見本園を見学し、また移動式穀物実取機(Crop crasher)や採種のため穂刈した残りの刈株全部を土中一八吋まで埋め込んで行くバーテカル・マルチュアー(Vertical mulcher)という珍らしい農具も見た。然し此処(The Fort Reno Experiment Station)はトリデの字が附いている通り、昔の有名な騎兵隊跡であつて、現在の事務所は当時の兵舎だという。案内してくれたオクラホマ大学農学部長は如何にも誇らしげに紹介したものであつた。

(4) この地方は五十年前に漸く白人が居住するようになつたというだけに、土産店には昔懐しいインデアンの絵葉書ばかり売つている。また毎週一回オクラホマシティ街頭に相対峙したカウボーイの早撃ちショウーがあり西部劇の実演を楽しんでいるという話であつた。われわれは今は記念物になつたアメリカンバァファローの勇姿を金網越しに無料拝見したに過ぎなかつた。かように大草原オクラホマは、カウボーイと騎兵隊とインデアンの郷愁に満ちたアメリカらしい印象の土地であつた。

シカゴへの道

九月十九日、テキサス州境のウッドワードを朝五時慌しくも出発した。シカゴへの道としてオクラホマシティ空港まで二○○哩、バスは時速六○哩(約一○○キロ)三時間半の旅行である。シカゴ行の予定時間を繰上げる目的であつたが、来て見ると空席が足りずくじ引のあとガッカリ組が出来たりした。愈々飛行機が到着して全員乗れるとわかり一同心から喜び合つたのは旅先のこととて当然であつた。然し乗つて見ると空席だらけだ。これでアメリカの飛行機は来て見なければわからないのが真相だと諒解することにした。これは現実的安全正確主義とでもいうのであろう。然しスチュワーデスはアメリカ女性の代表的婦人と思われる程明朗で美しく親切だから、飛行機に乗つて仕舞うとお客の不平が無くなる仕組みになつているのかも知れない。果してシカゴまでの美しい彼女(ボンナ嬢)に対し、われわれの若い通訳氏が打たれた印象は強く深いものであつたらしく、彼女の明日の休日のひとときを友人として交際することに成功した模様であつた。かくして一カ月余に亘つた暑い南部四州に別れを告げシカゴを経て、涼しいウイスコンシンへ北上する旅路についたのであるが、南部最後の印象、……それはオクラホマシティ空港の待合室で、黒眼鏡の黒人靴磨がお客を呼ぶ声「シューシャイン・アナザー」(Shoe shine another)の甲高い哀調であつた。

ウイスコンシン州へ

ウイスコンシン州は北緯四五度に位し、五大湖の西に在るポトゾル土壌(Podozolic soil)地帯である。すなわち北はスペリアー湖を経てカナダ国境、東はミシガン湖、西はミネソタ、アイオワ両州とミシシッピー河の上流で境した処で農耕期は短く五、六カ月である。州の字名を酪農地帯(Dairy Land)と呼んでいる如く有名な牛乳生産地であつて、合衆国最大の全乳販売場になつており、従つてチーズ工場がバター工場と共に最も集中している地帯でもある。そして日本の酪農とはきわめて密接な関係に在

る先進地である。

飛行機から見ると、将棋盤のように整然と区劃され、長方型に囲われた畑地には玉蜀黍と牧草地があり、道路は規則正しく走り、赤く塗つた大畜舎、ジュラルミンの屋根が光る円塔のサイロ、そして豊かな農場住宅が散在して如何にも酪農を表徴した好ましい姿である。昨日まで馴染んだ南部や大平原地帯とは全く打つて変つた世界であることに眼が輝くのであつた。そしてわれわれは張り切つて州都メディソンのホテル・ベルモントに着いたのである。

メディソンはメンドタ、モノナなどの湖に面した緩やかな坂道の落着いた町、州庁の在る人口十七万の農村都市でありウイスコンシン州立大学の所在地でもある。そして此処には世界的な建築家ライト氏（東京の帝国ホテル建築者）の家が在るという話であつた。そして三年前にライフ誌が発表した処によると、アメリカで一番暮し易い都市はメディソンであるとのことである。

ウィスコンシン州の研修は州内各方面に亘り珍らしい訪問に終始した。それは土壌保全部長ラック・デンスモア氏が沢山の見学場所一覧表の中からわれわれに希望カ所を自由に選ばせた関係からである。そして彼自身も一日案内役を買つてくれ、最後には一週間に亘つて訪問した先々に対する礼状を出してやるからと、サインを求められるなど全く周到な心遣いにはいたく感謝したものであつた。ここに彼の話の一端を紹介し酪農州の参考に供することにしよう。

農家経済のあらまし

州一千万エーカーの作付体系は、玉蜀黍、牧草（主として乾草）、燕麦の輪作で、この作物がそれぞれ三分の一の面積を占めている。その玉蜀黍の五〇％はサイレーヂ用で一エーカー八ㇳ位の生産があり、その種子は殆ど大学から出される一代交配種であつて、中・南部では百十日、北部では八十日生育の極早生系のものである。玉蜀黍の子実収量は一エーカー六五ブッシェル（反当三・二石）位で政府支持価格は一ブッシェル一・一〇ドである。燕麦の収量は一エーカー六〇ブッシェル（反当三石）位で政府支持価格は〇・七七ドである。そして乾牧草は一エーカー三ㇳ（反当二七五貫）位である。

酪農州ウイスコンシン地方の農村風景。
整然とした区画に栽培されている作物の大部分が玉蜀黍（白つぼく見える所）で，所謂コーンベルトの中心地帯であり，一戸一戸の農家には必ず大きなサイロが立つている。

次に牛乳は、シカゴ価格で市乳一〇〇ㇼ三・五〇ドル（この場合農家手取は三・二五ドル）で中間業者は成立たない。また生産者価格一コート（約二ㇼで換算約一升）七セント（二五・二〇円）のものが消費者価格になると一コート二二セント（七九・二〇円）となり三倍余も跳上る処（原価計算の内容は解らない）が日本の市乳によく似ているようだ。

この価格は民間の代表者と協議して、政府が決定するそうである。また牛乳の五〇％以上は組合を通じて販売されているが、牛乳会社の買取価格も同じである。そして市乳と乳製品の原料割合は六〇％対四〇％位である。なお最近は何かと取締りが非常に厳重なので、小経営者あるいは新規経営は肉牛の飼育に転向する傾向に在る。然し何れも生産過剰で行詰つているから経営内容は苦しい者ばかりである。

牛肉は一ㇼ二八―三二セント（一二〇匁―一〇一・四〇円―一一六・八〇円）でこれは良い値段だ。そしてこれがビフテキ（Beefsteak）の小売値になると一ㇼ一・〇〇ドル―一・五〇ドル（三六五・〇〇円―五四七・五〇円）で一躍三倍以上も高価なものになる。

豚肉は一ㇼ六九セント（一二〇匁―二五一・九四円）位で牛肉の約二倍の高値であり、五カ月で二〇〇ㇼ（五万円余）まで肥育が可能である。

卵は一ㇼ三二セント（一一六・八〇円、一コ一四円見当）だがこれは二二セント（一ケ十円）位まで値下りが予想される。

七面鳥は一ㇼ四五セント（一六四・二五円）で日本では飛び着くような安値である。

見学の短報

（一）ウイスコンシン州立大学附属農場

先ず真先の見学場であつた。此処では、スムーズブロームグラスやチモシーの葉の病気（Herminthoiom）根の病気（Pythium）や胴葉病（Blight）の発生時期、赤クロバーの炭疽病（Anthraconose）の種類、アルファルファの耐寒性や立枯病など殆ど病気に関する純研究が多いようであつた。

（二）農家トム・ストール氏訪問

初めて見る酪農家の実態で仲々興味深いものであつた。自作農一四四エーカー（五七・六町歩）の中農で緩傾斜地の畑には玉蜀黍、燕麦、各一六％、牧草六五％、煙草少々の経営である。大小家畜は六〇頭で内乳牛三十六頭を飼育、農機具はトラクター三台、コンバイン、ヘーテッダー各一台を所有しその他耕耘機、サイロ詰込機、コーン採取機などは機械賃貸屋（カストム・オペレーター）から借りている。

乳牛は一頭平均年間三七八ㇼの乳脂肪を生産し、ミルクはシカゴへ出している。牧草はアルファルファ（Vernal）とスムーズブロームグラスの混播で八年輪作を行なつている。給与法は牧草地から刈つて来て与える舎飼式で非常に有利だと力説した。サイロは口径一四呎、高さ五五呎で一二五ㇳ

入れ、コーン、グラス共に使用するが七カ月分を必要とする。

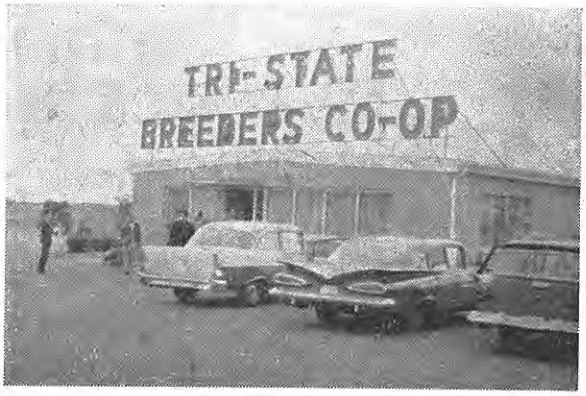
牛舎には蠅取や臭気消目的の薬剤や石灰を撒布する機械を据付け、夏分は扇風機も取付ける気の配りようである。糞掃除はBarn Cleanerを使う。これら全ての労働は主人一人で一日八―一〇時間で賄つているのである。なお主婦の好意で住宅の各室を拝見した上、手製の菓子まで御馳走になつた。さて農家といつてもホテルの設備と殆ど変わりが無い位充実し、そしてきわめて清潔な住宅なので農家という言葉を使うべきか甚だ戸惑う結果になつたのである。

(三) 五五〇哩の自動車旅行

ウイスコンシン北西部一巡視察のため九月二十二日メディソン出発、自動車の行手田舎道は通る車もなく時速八〇哩（一三〇キロ）だ。若き日のリンカーンがインデアンと戦つた古戦場、その頃そのままのトリデの跡など珍しいものであつた。そしてクロマツ、ニレ、ポプラ等の樹木、白樺林の美しい紅葉、アヂサイ、サルビヤの花、ノギク、アザミ、アカザ、オーバコ等の雑草、何れも北海道への郷愁にふさわしい風景である。そして今は快的な涼風を受けての北進だ。森林には狼、山犬、熊、鹿などが住み羊を飼うことが出来ないとか。冬は積雪三〇吋で寒く黒人は住むことが出来ないなど三日前まで居た南部との急変で、頭のピントが合わないのはどうすることも出来ないボケであつた。

(四) マッシュフィルド農業試験場

ここMarshfieldでは専らサイレージと給与試験についてのことだつた。すなわち夏は(1)放牧（Pastur）(2)青刈舎飼（Green feeding）(3)サイレージ舎飼（Corn Grass）で、冬は乾草とサイレージの組合せ給与試験で(1)ソフトサイレージ（Soft silage）は玉蜀黍の穂を切り三五%の水分でサイロに入れる(2)ヘイレーヂ（Haylage）は新語であるが乾草の醗酵を防ぐため水分五〇%、乾物五〇%割合のサイレージにする。なお乾草を造るには乾草機（Crop dryer）を使用し、華氏一二〇―一四〇度の温風を扇風機で吹上げるのだが、一五〇度になると燃え出すので注意しなければ火災を起す。



ウイスコンシンの人工授精組合
種付数年間25万頭で世界第4位、種牡牛90頭を有す。

(五) 農家ムーイ氏訪問

緩傾斜地一二六エーカー（五〇・四町歩）の自作農で牛七〇頭中、乳牛三八頭飼育、牧草はアルファルファ、スムーズブロームグラス、ラデノクロバー、アルサイクまたはレッドクロバーの混播で五年目更新だがプラウは用いず、全てデスクハローを縦横にかけた後カルチベーターを使用する。この作業は秋に終り種子は春に播く。なお五年目更新は理論的な根拠でなく土壌保全関係の補助規則によるものである。

濃厚飼料は自作の玉蜀黍、燕麦を粉砕して給与し購入はしない。そして毎年一エーカー当りの収入は一〇〇ドル以下のことはない。労働力は主人と息子一人だが、その息子は年間二カ月位の暇が出来て他へ働きに行く余猶をもつ中農である。

(六) モーテルの朝晩

一行一二名が泊つたら満員になつた田舎（Durand）の一軒家Motelという自動車ぐるみの旅館は周囲が藪で夜通し虫の鳴く淋しい木造平屋建のホテルであつた。湯沸釜が小さいのであろう各室のシヤワーも遅浴びの客は冷水ばかり出るので震え上つて騒いだりした。翌朝肌寒い霧の中を街へ朝食に行つて二日目の行動が開始された。

案内の先生は路傍に有つた珍らしい野生の米を見て説明した。この米を黒い家鴨（アヒル）が食べに来るのだがアメリカ人はその家鴨を食べるのだ。と、これに対し、日本人ならその米と家鴨両方とも食べます。と答える者があつて朝からの爆笑であつた。

(七) 農家エアルックソン氏訪問

傾斜地一二〇エーカー（四八町歩）の経営で乳牛三六頭、鶏一、〇〇〇羽で養鶏を加味している点今迄の農家と相違がある。その鶏の離れたのが五羽程別の納屋で遊んでいたらしく、一行の一人が何気なくその納屋に這入つたとたん件の鶏が異人乱入と仰天、けたましい絶叫と共に表へ飛び出した。これに彼も驚いて外へ飛び出した。外にいた農夫が事件かと驚いて、チツキン（Chicken）と叫んだ。後で案内人が小声で曰く、チツキンは鶏だが然し憶病者のしやれ言葉だと。

(八) ラ・クロス傾斜地農業試験場

昨日は北上西進三〇〇哩の強行軍であり、今日はメキシコ湾から二、三〇〇哩も上流位置のミシシッピー河に沿つて南下する二五〇哩の旅行である。LA CROSSの傾斜地農業試験場は農務省の機関で看板の通りの傾斜地で集中降雨による土壌流亡の点では日本農業の参考になる処が少なくなかつた。

場長ヘイズ博士の説明は、要するに玉蜀黍（Corn）と穀類（Oat Barley）と牧草（Hay）の輪作や間作、交互作などを傾斜度合と土壌流亡の割合から算定して結論つけようとするのである。そしてこれらの傾斜地に対する作付（Croping）そのものを帯状（Strip）に細長くそして交互に作付するとか、あるいは高度を同じにする等高線（Contour）栽培にするとか、または片寄つた傾斜地は段々畑（Terrace）にしたりする色々な方法に、必ず牧草地（Pasture）を中に挿んで雨水を調節したり、排水溝へ誘導したりして浸蝕（Erosion）を防止し土壌保

全（Soil conservation）の万全を期しつつ増産する研究なのである。また広い土地における雨水の条件によつては貯水池を設けて一層水の調節を図るのであるが、この堤塘の牧草（Grass and Legum）は禾本科であつて豆科は昆虫、小動物の関係から利用しないのが常識のようである。

傾斜地土壌流亡試験

傾斜度合（距離七二呎）	一エーカー当年間流亡土壌 綬類普通栽培（六年平均）	玉蜀黍・牧草・綬類輪作等四種栽培（一三年平均）
三 %	五 トン	〇・二 トン
八	一一	一・四
一三	一三	五・二
一八	二九	一〇・六

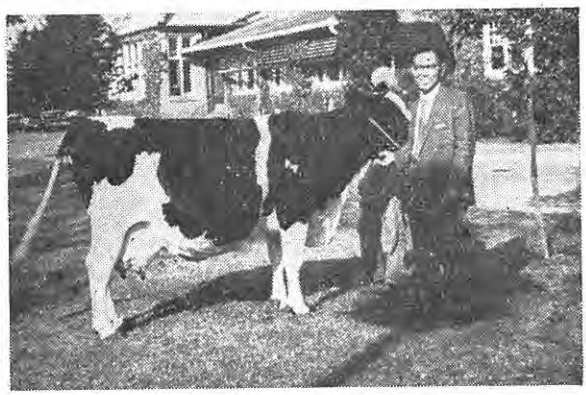
（九）人工授精所（組合）

Westby に在る TRI-State Breedevs Cooperative は三州九二郡二二、〇〇〇人の会員で構成され、昨年二五万余頭の種付実績は実に世界第四位の成績であるという。所有種牡牛九〇頭、内当所七種七五頭実在、一頭一回の精子一千万位あり三、〇〇〇頭の授精が可能であると若い博士の説明であつた。

ここで夕方となり五五〇哩の自動車旅行全日程を終つた。そこで五哩先の田舎食堂で夕食を終えて帰るために急いだ。ところが車中で貴重なノート紛失騒ぎが起きた。忘失先が授精所なら無理もないと妙にかんぐる者もいたが兎に角大慌てに閉門迫る夕暮の道をとつて返した。お互に疲労から来る健忘と過剰刺戟後にあり勝ちなことだがノートが戻つたのは何よりであつた。

（十）ミルウォーキと農機具会社

九月二十四日は土壌保全部長の案内で昨日に引続き一五〇哩の見学であつた。Milwaukee は北欧系の人口八〇万、州最大の市である。サツポロビールが宣伝する北緯四五度のミューンヘン、サツポロ、ミルウォーキーが爽な本場ビールの味のする処だというミシガン湖に面した工業都市である。また市営球場は球団ブレーブスのホームグランドであり、一九五七年の世界ノンプロ戦で日本チームが優勝した記念の球場でもある。



ウイスコンシン州のパブスト牧場。
全米牝牛共進会において優勝2回10歳のプリンセス・マーガレット・ローマパブストと筆者。

Allis Chalmers 農機具会社は元軍需工場で水力発電用ポンプ、トラクター及び原子力、セメント、汕蒸溜等多種機械製作では全米一だという。全工場労務者四二、〇〇〇人、敷地一五〇エーカー（六〇町）、専用線、延二二哩、場内舗装路四哩、分工場一七をもつ。われわれが見た農用トラクター部だけの素通り見学が二時間を要した大工場で、一人では迷子になること疑なしだろう。工場は苦手だ。

（十一）パブスト牧場

オコノモウォークの Pabst Farms Inc は元ビール会社社長の経営になる有名な牧場だがここで図らずも二人の日本青年実習生（長野県伊奈市黒河内君、北海道北見市斎藤君）に会つたのは嬉しい限りであつた。牧場の総面積一、四〇〇エーカー（五六〇町歩）で、作付は玉蜀黍四三五、燕麦一一〇、採草地三〇〇、放牧地二五〇、その他三〇五エーカーである。牛は四三五頭、内乳牛一八〇頭で今最高の種牡牛はオリバー号、乳牛ではレイクラー号だ。かつて全米ミス・アメリカ賞二回のローマパブスト号をわざわざ庭に引出して拝まして貰う光栄に浴した見学者は、そうざらには無かろうと、記念写真に忙しい一時もあつた。そして事務所一杯に飾つてある数え切れない賞には只々感歎するばかりであつた。

（十二）オスカーメイヤー食肉罐詰会社

メディソンに在る Oscar Mayer & Co. は牛より豚を主体にし年間一五〇万頭を買付け、その売上げは二億六千万ドルの巨額である。屠殺は、豚はガス室に入れ一酸化炭素により一時間一、〇〇〇頭（一分間約一七頭）を処理し一工場当り能力は全米一である。牛は一時間五五頭（一分間約一頭）の割であつて、この牛は一組三頭をエレベーターで四階に上げそのまま拳銃で眉間を射ち、未だ生きて痙攣しているのを直ちに逆釣りにして、首を掻切り結核検査室に持つて行くのである。そこは膝を没する血の海で全く百鬼迫る物凄さと、生臭ささに耐えられず、数分とは立停つていられない場所である。然し製品倉庫では、(1) Prima (2) Choice (3) Good (4) Standerd のスタンプ順に食欲をそそるというのだから全くやり切れない話だ。

豚は三呎おき位に逆釣にし二回の薬湯で脱毛すると先ず喉を切つて首をぶら下げるのだが、この時両方の眼球が開け放しのままなのは、何とも形容詞の無い無気味さである。検査官の処で残りの首皮が切られ（ここで胴体に別れ）次いで鼻、耳とそがれる一貫流れ作業で一時も停止することがない。さて地上では豚群が屋上のガス室目指し坂道の廊下一杯に絶間なく上つて行く。彼等は飼にありつけると思うのかキキとして死地に急ぐのである。その後二日程は何としても血肉の臭が鼻についたり、背面で無表情に庖丁を動かす工員を思い浮べたりしたが、これは仏心の精ばかりと言切れないものがあるからかも知れない。

『さて、アメリカの草地や旅日記の断片を過般来四回に亘つて綴つて来たが、二カ月間に亘つての先進国の見聞は、相当内容を圧縮しても容易に書き尽せそうにもないが、何とか次号を以て完結の定です。

この拙文が読者の皆様に少しでも御役に立てば望外の幸いです。』